祝 辞

一般社団法人 沖縄県医師会 会長　安里 哲好

この度、沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎えられ、ここに記念誌が発刊されますことに対し衷心よりお祝い申し上げます。

さて、沖縄県小児保健協会は、1973（昭和48）年の創立以来、「すべての子どもに活きる力と夢みる心を」という使命のもと、乳幼児の健康診査から小児保健に関する調査研究、学術講演会の開催など、多岐にわたる活動を展開してこられました。これらの活動は、沖縄県の子どもたちの心身の健康を支え、本県の小児保健の資質向上に大きく貢献してこられました。

なかでも、県内40市町村で実施される乳幼児健康診査は、子どもたちが健やかに成長するための基盤を築き、地域社会全体で子どもたちを支える体制の構築に寄与してこられました。また特に印象的なものとして、沖縄県はしか"0"プロジェクト委員会の発足とその成果が挙げられます。1999（平成11）年以降、沖縄県内で発生したはしかの大流行を受けて立ち上げられたこのプロジェクトは、予防接種の普及と接種率の向上に尽力され、県内の子どもたちが安心して予防接種を受けられる環境を実現されました。その結果、2005（平成17）年には麻疹患者発生がゼロという顕著な成果を達成されました。翌2006（平成18）年からは麻しん・風しん混合ワクチン（MR）による2回接種が定期接種として行われるようになり、感染症から子どもたちを守るための先進的な取り組みは、全国からも高く評価されました。

ここに改めて、沖縄県小児保健協会の永年のご尽力に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

沖縄県小児保健協会がこれからも地域社会における小児保健の質の向上と子どもたちの健やかな成長を支えるために、様々な支援を続けていかれることを心より願っております。

結びに、創立50周年の節目の年を迎えられ、温故知新の心で記念誌「こどもが輝く未来への物語～これまでの50年、これからの50年～」を発刊され、未来に向けた展望の糧とされますことは誠に意義深いものであると思料いたします。

沖縄県小児保健協会の今後のますますのご発展と宮城雅也会長はじめ会員並びに関係各位のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

こどもが輝く未来へ ～共に歩む～

沖縄小児科学会 会長
琉球大学大学院医学研究科育成医学（小児科）講座　教授
中西 浩一

平素より沖縄小児科学会の活動にご理解、ご支援を賜りましてありがとうございます。この度、沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎えられること、誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。創立50周年の節目を迎えるにあたり、沖縄小児保健センターの愛称を「こっぽ KoPHO」と決められましたことも大変素晴らしく、協会の更なる躍動を期待させるところであります。小児保健協会は、関連する多職種の会員が共に研鑽を積み協力して活動されていることが何よりもの特徴であり、他の小児関連団体とは一線を画すところであります。

1. 過去への感謝

50年の歴史を築いてこられた沖縄県小児保健協会におきまして、現会長の宮城雅也先生をはじめ、歴代の会長、役員ならびに会員の皆様の不断のご尽力に心からの敬意を申し上げます。協会は子どもたちの健やかな成長を願い、小児を取り巻く保健、医療、教育、福祉の向上、さらにこれらを広く社会へ普及啓発する活動を行ってこられました。これらの医療と保健の分野での先駆的な活動が、地域社会に多大な影響を与え、健やかな子どもたちの成長を支えてきたことに深く感謝申し上げます。

2. 未来への期待

今後も沖縄県小児保健協会におかれまして、医療と保健が連携し、地域の子どもたちがより健やかに成長できる環境が整えられることを期待しています。50年の実績が未来の土台となり、より充実した子ども時代が提供されることを願っています。

3. 協会と学会の連携

医療の専門性と保健の知見が融合した協会と学会の連携が、これまでの50年でどのように地域に貢献してきたか、その歩みを振り返りながら、今後の更なる協力に期待を寄せます。私ども沖縄小児科学会も引き続き皆様と共に尽力してまいります。

4. 未来へのメッセージ

最後に、未来の子どもたちに向けて、私どもの医療と保健の共同の歩みが、彼らの未来をより素晴らしいものにしていくことに全力を尽くすことを誓います。沖縄県小児保健協会50周年を迎える素晴らしい機会に、沖縄県の子どもたちの未来がより一層輝かしくなることを心より願うとともに、沖縄県小児保健協会の益々のご発展を祈念いたします。

50年の歩みに感謝しつつ

沖縄県小児科医会 会長　浜端 宏英

沖縄県小児保健協会創立50周年心よりお慶び申し上げます。これまでの50年、沖縄県のこどもたちのために尽力されてきたことに感謝申し上げます。貴協会の創立に当小児科医会の4名の先生方が発起人であったことを大変うれしく存じます。現在の貴会の充実ぶりを見ますと先達らも喜んでいることと存じます。

さて、貴協会は沖縄県のこどもたちの乳幼児健診運営を行うために市町村から委託をうけて運営されています。これまでの50年では、家庭訪問支援員研修会や保健師研修会など乳幼児健診に関連する様々な職種の研修などを行ってきました。特に小児科医師への研修として、医師研修会とランチョンセミナーがあります。乳幼児健診は多職種で行っていますので、健診を一定のレベルに保ち、さらに充実させるために接遇研修会や虐待関連の研修会なども継続して実施をお願いしたいと存じます。

さらに乳幼児健診事業以外の保健分野でも積極的に取り組んでいただいております。とくに2001（平成13）年に発足した「沖縄県はしか"0"プロジェクト委員会」の事務局を引き受けていただきました。沖縄県のプロジェクトは全国に先駆けて結成され、我が国の麻疹（はしか）排除をリードする役割を果たしました。普段から多職種での活動を行っている貴協会がなければ実現できなかったことだと思われます。プロジェクト以外にも「おきなわ小児VPD研究会」、「腸重積発生調査」などがあり、いずれも調査レベルが高く、国の研究班に取り込まれています。さらに小児救急逼迫改善のための「子ども救急ハンドブック」の作成、「子どもの生活習慣対策委員会」や「親子で歯っぴ～プロジェクト」など実際の小児保健の課題に沿った活動もサポートしています。また、コロナ禍にもかかわらず、2021（令和3）年「第68回日本小児保健協会学術集会」を成功させたことは、特筆に値することだと思われます。

こども家庭庁の発足により保健・医療・福祉の切れ目ない連携が模索されています。小児保健協会・小児科学会・小児科医会は小児医療専門3団体としてさらなる活動が求められています。沖縄県のこどもたちのために、ともに手を取り合って活動していけたらと考えています。貴協会の今後の活動に期待しております。

沖縄県小児保健協会創立50周年に寄せて

一般社団法人 沖縄県歯科医師会　会長　米須 敦子

能登半島地震で被災された方々に、心からお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を、心よりお祈り申し上げます。

沖縄県小児保健協会創立50周年を祝い、心から感謝と共にお祝い申し上げます。1歳6か月児健康診査や3歳児健康診査の充実に取り組み、地域格差を是正するために、専門家チームによる集団健診システム「沖縄方式」を確立され、今日まで乳幼児健診事業および歯科検診事業の充実に努めてこられましたことに、心から感謝申し上げます。

沖縄県における令和3年度の3歳児でむし歯のある者の割合は18.9%、一人平均むし歯数は0.59本です。年々減少し、全国との差は縮小傾向にありますが、全国ではまだ下位に位置しています。さらなる改善に向けた取り組みが必要です。また、乳幼児期のむし歯は減少していますが、地域差や、多数のむし歯がある者（3歳児で4本以上むし歯がある）など、個人差が存在しています。令和3年度のむし歯のある者の割合は、1歳6か月児で1.44%、3歳児で18.9%、5歳児で38.5%と、年齢が上がるにつれて増加しており、全国との差が拡大しています。

これらの状況を鑑み、沖縄県歯科医師会としても、沖縄県歯科口腔保健推進計画（歯がんじゅうプラン）に沿って、歯みがき（仕上げみがき）、フッ化物応用、甘味（砂糖）の適正摂取方法など、むし歯予防に関する知識の普及ならびに啓発を保育所や児童園などで進めています。また、幼児期からかかりつけ歯科医を持ち、定期的な歯科検診や予防処置、必要な歯科保健指導や治療を受けることを啓発しています。むし歯の有病状況の健康格差の縮小に有効とされる集団でのフッ化物洗口を4歳以上の幼児を対象に保育施設等で推進しています。コロナ禍で取り組みが減少傾向にありますが、子どもたちの健やかな成長発育のために、啓発活動を重視して進めてまいります。

今後も貴会と密な連携をとり、「親子で歯っぴ～プロジェクト」の推進をはじめ、口腔保健活動を進めてまいります。終わりに、沖縄県小児保健協会50周年を契機として、ますますの発展と、会員の皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。

沖縄県小児保健協会創立50周年に寄せて

一般社団法人 沖縄県薬剤師会 会長　前濱 朋子

このたび、沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

「こどもが輝く未来への物語～これまでの50年、これからの50年～」をメインテーマに開催されました記念式典では、会場に展示されておりました琉球政府時代の「母子手帳」に驚き、感動いたしました。沖縄県の小児保健分野における貴会の活動の歴史を象徴するものであると思います。ちなみに「お薬手帳」の導入は1993（平成5）年からです。

コロナが収束の兆しを見せた2023（令和5）年、宮城雅也会長が当会にご来訪され、お話する機会がございました。その中で、「常日頃、保育園・幼稚園の環境が気になり、様々な提案をしていたが全く改善することが無かったのに、薬剤師の皆さんのおかげで保育園・幼稚園の環境がとても良くなった。」と話してくださいました。

「えっ、医療ではなく…」と一瞬戸惑いましたが、「学校薬剤師」の活動をご評価いただいているのだと気がつきました。医師や歯科医師が児童生徒の健康診断を行うように、薬剤師は学校の環境衛生面で子どもたちに関わっております。具体的には、飲料水やプールの水質検査、空気中の揮発性有機化合物等の検査、教室の照度の測定などを実施しております。

保育園・幼稚園につきましては、認定こども園の制度化に伴い学校保健安全法の対象となったことにより（一部例外を除く）、これらの施設にも学校薬剤師が配置されるようになりました。こうした当会の活動を認めていただき、また環境衛生において薬剤師が果たす役割から貴会の理事に薬剤師が就任することになり、大変光栄であると同時に責任も重く感じております。

さて、令和6年度より施行される第8次医療計画では、医療提供を必要とする医療的ケア児の在宅の場面での薬剤師の役割も明記されております。関係職種間で連携し、医療メンバーとして家族に寄り添うことで、これからますます貴会との絆も深まっていくと考えます。

新たな愛称「こっぽ KoPHO」と共に次の50年の歩みをスタートされました貴会の進展が大変楽しみでございます。

小児保健協会50周年記念に寄せて

公益社団法人 沖縄県看護協会　会長　平良 孝美

沖縄小児保健協会が50周年を迎えられるにあたり、公益社団法人沖縄県看護協会を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

1972（昭和47）年、沖縄が本土に復帰した翌年の1973（昭和48）年に、次代を担う子どもたちの健やかな成長と、沖縄の小児保健の向上を目指して、小児科の先生方が発起人となり、当時の母子保健行政が一致協力して、現在の沖縄県小児保健協会が創立されたとお聞きしました。

沖縄県の小児保健協会は、小児科専門医のみでなく、産婦人科医、保健師、助産師、看護師、栄養士、臨床検査技師、養護教諭、保育士、市町村職員、母子保健推進員等小児保健に関わる多くの職種が会員として、それぞれの立場から、小児保健協会の活動に参加し、沖縄県の母子保健の向上に多大な貢献をされていらっしゃいます。また、このような組織体制による活動は、全国の小児保健協会にも例のない組織活動と伺っております。

小規模離島を含む全県下で、市町村の委託を受けて実施している乳幼児の健康診査のみでなく、その結果について情報処理を行い、市町村、関係機関に還元する等沖縄の子どもの心身の健全育成に寄与するという貴会の創立時の目的に沿い、創立から半世紀、脈々と活動を展開してこられました。その活動が評価され、1992（平成4）年に「保健文化賞」を受賞され、更にそれを契機に「沖縄小児保健賞」を設置し、県内の小児保健活動に功績のある個人や団体を表彰する等多方面から沖縄の子どもたちの心身の健全育成に寄与されておられます。また、貴会の特筆すべき活動として、2001（平成13）年に発足した「沖縄県はしか"0"プロジェクト委員会」の事務局として、県内のはしか撲滅にご尽力されたことがあげられます。更に、沖縄県との共催事業として、毎年沖縄県母子保健大会を開催し、母子保健に功績のあった個人及び団体を表彰し、関係者の活動への動機付けを行う等多方面から小児保健活動に多大な貢献をされていらっしゃいます。

沖縄県小児保健協会の今後ますますのご発展と会員の皆様のご健勝をお祈りしますとともに、沖縄の将来を担う子どもたちの健やかな育ちを支援できるよう、なお一層のご活躍を祈念申し上げ、祝辞といたします。

たくさんの子どもたちの笑い声が響き渡る、ここちよい未来を目指して

一般社団法人 沖縄県助産師会 会長　川満 恵子

沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎え、記念誌を発行されるとのこと、まことにおめでとうございます。50年の長きにわたり、沖縄県の小児保健の発展に貢献された貴協会の皆様へ、沖縄県助産師会を代表して感謝とお祝いを申し上げます。

貴協会は、沖縄の子どもたちの健康と幸福を支えるための多くの活動をしておられます。現在、離島を含むほとんどすべての市町村の乳児健診を実施しておられることは、島嶼県である本県における医療資源の偏在という問題にチャレンジし続けてきた結果ではないでしょうか。“すべての子どもたちの健康を守る”という皆様の熱い思いとご尽力に頭が下がります。また、母子保健従事者を対象にした研修会は、地域で訪問活動をする助産師の必須の研修として活用させていただいております。さらに貴協会が編集した「子ども救急ハンドブック」は、新生児・乳幼児を育てる両親や家族にとっても支援を行う助産師にとっても心強い味方であり感謝申し上げます。

2022（令和4）年の県人口動態統計によると、沖縄県の出生率は、 1974（昭和49）年以来49年連続で全国1位を維持していますが、合計特殊出生率は、1.7で過去最低となり、出生数が死亡数を下回り、1899（明治32）年の調査開始以来はじめて自然減となりました。本県においても少子化、人口減少の波は歯止めがかからない状況です。家族、母親や子どもを取り巻く社会環境が変化するなかで、子ども虐待、DV等々課題は山積しており、ハイリスクの妊産婦・子どもたちの支援が不可欠です。また、少子化、晩産化の影響による育児経験の不足、経験共有の不足等による育児不安も増大しており、その対応もますます必要とされています。

沖縄県助産師会は会員250名ほどの組織ですが、女性のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツに関わる専門職として、次の50年、100年後を見据え、たくさんの子どもたちの笑い声が響き渡るような心地よい未来を目指して、子どもを安心して産み育てる環境を整えられるよう、貴協会とともに、さらに発展的な活動を展開していきたいと願っています。

結びに、沖縄県小児保健協会のますますのご発展を祈念しまして、お祝いの言葉といたします。

沖縄県小児保健協会創立50周年に寄せて

公益社団法人 沖縄県栄養士会 会長　村濱 千賀子

このたび、沖縄県小児保健協会創立50周年本当におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

全国でも沖縄方式と高く評価された乳幼児集団健診システムを実施するなか、医師や看護師等とともに専門職チームの一員として、また、貴協会が運営する様々な事業に沖縄県栄養士会の会員が関わり貢献してきたことを会長として誇りに思っております。

今回の執筆にあたり、諸先輩方より活動をお伺いしたところ、貴協会の作業部会（主に市町村の栄養士と当会の栄養士で組織）で乳幼児健診用の食育媒体作成を担当した際、お手本等何もない中でスタートし、丁寧なパンフレットづくりに心がけたとお聞きしました。そのパンフレットは、各市町村の状況や厚労省の離乳食支援の改訂等に合わせバージョンアップしながら現在まで受け継がれているとのことでした。

沖縄県栄養士会は、県民が健康で心豊かに生活できるよう長寿復活を掲げ、全てのライフステージに対応した食育活動を進めております。これまで、長寿を阻む生活習慣病を抱えた働き盛り世代を中心に取り組んでまいりましたが、最近では、これから社会に巣立つ中高校生まで対象を広げ、日常的な食事のバランスを瞬時にチェックできる体験型SATシステムを活用した栄養教育に力をいれています。しかし、生活習慣は乳幼児期にその基本が身につくといわれており、乳幼児期の健康教育、食育の重要性を痛感しています。

少子高齢化、核家族化、グローバル化が急激に進み、個人の価値観や生活様式の多様化、地域との繋がりが希薄になっている近年において、将来子どもを取り巻く環境がどのようになっていくか想像がつきません。しかし、本土復帰間もない激動の時代にあっても、創意と工夫で地域の子どもの健康づくりを支えた貴協会の50年の歩みを振り返ると、これからの時代の変化に対応しながら子どもが輝く未来の物語作りのために邁進すると確信しています。50年後の子どもの未来ひいては沖縄の健康長寿のために小児保健協会の活動に、皆さんと共に関わっていきたいと考えています。

終わりに、（公社）沖縄県小児保健協会のご発展と関係者の皆様のご健勝を祈念いたします。

沖縄県小児保健協会「創立５０周年」祝辞

一般社団法人 沖縄県歯科衛生士会 会長　野田 直美

この度、公益社団法人沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎え、ここに記念誌を発刊されます事に対し、お祝い申し上げます。今から50年前に学術団体として設立され、その後、法人へ移行し現在の公益社団法人沖縄県小児保健協会として活動を継続されております。ひとくちに50年という長きに渡る小児保健活動は、普及啓発、人材育成、関係団体等の連携、沖縄県の小児保健の資質向上に寄与されております。宮城雅也会長ならびに歴代役員の先生方、スタッフの皆様方の情熱による賜物だと心より敬意を表します。

また、50周年記念式典での「子どもを取り巻く社会環境が変化するなかで、ハイリスクの子ども達を支援するだけでなく、ハイリスクを“なくす”社会を目指し、乳幼児健診への取り組みの重要性」を述べられた宮城会長のご挨拶に大変、感銘を受けました。小児保健センターの愛称「こっぽKoPHO」が児の「子」と保健の「保」シンボルマークの鳩をイメージした事。KoPHOが「KODOMO PRIMARY HEALTH ORGANIZATION」の頭文字から生まれた事。これまでの50年とこれから先の50年も多職種との連携を大事に沖縄の子どもたちの未来を育んでいくという決意を感じました。

乳幼児健診が沖縄方式と言われ、様々な専門職が携わってこれまでの歴史を作りあげて来られました。沖縄県歯科衛生士会でも1歳6 か月、3歳児健康診査での歯科保健相談を担当させて頂いております。令和4年度の報告では、う蝕有病率が1歳6か月児（1.2%）、3歳児（15.4%）と前年に比べ減少致しましたが、全国平均とはまだ開きがあります。家庭における仕上げみがき実施率の向上、低年齢からのフッ化物応用を普及定着させることにより、効果的な乳幼児期のむし歯状況の改善を図ることを目的として、乳幼児歯科保健指導媒体や指導マニュアルを作成頂き、家庭での「仕上げ磨き」「デンタルフロス」「フッ化物応用」の指導内容を統一する事が出来ました。

これらの多大なご尽力に感謝し、お礼を申し上げますと共に今後も益々のご発展をお祈りしお祝いの言葉と致します。

50周年を祝して

沖縄県母子保健推進員連絡協議会 会長　仲尾 洋子

公益社団法人沖縄県小児保健協会の創立50周年を心よりお祝い申し上げます。

沖縄県小児保健協会は、1973（昭和48）年の創立以来50年にわたり、沖縄県の子どもたちに寄り添い、その健康と幸福のために重要な役割を果たしてまいりました。貴協会の活動は、「子どもの心身の健全育成に寄与する」を目指し、子どもたちの健康を支えるだけでなく、地域の支援と共により良い未来を築いてきました。関係者の皆様の努力と情熱に感謝申し上げます。

特に注目すべきは、貴協会の乳幼児健康診査です。各市町村で行われる乳幼児健康診査では、私たち母子保健推進員も身体測定などのスタッフとして参加しています。沖縄方式と呼ばれる集団健診は、多職種による専門家チームが関わることで、他府県の関係者から高い評価を受けています。健診後のミーティングには母子保健推進員も参加し、情報共有を行っています。また、健診未受診児の家庭への訪問では、未受診の理由や家庭の悩み事を丁寧にヒアリングし、必要に応じて市町村の保健師に繋ぐ情報提供も行っています。これらの活動が、小児保健協会の目標である「すべての子どもを対象にすべての子どもが幸せとなる」に貢献していると自負しています。

また、沖縄県小児保健協会は、関係者の資質向上のために研修会や保健セミナーを開催しています。特に、沖縄県母子保健推進員連絡協議会に対する貴協会のサポートは非常に力強く、研修会の共催などを通じて大きな支援をいただいています。このような協力があったからこそ、県協議会も2024（令和6）年に設立20周年を迎えることができたと確信しています。これからも、沖縄県の親子の笑顔のために努めてまいりたいと存じます。

結びに、沖縄県小児保健協会の更なる発展と関係者の皆様のご健康を祈念し、創立50周年を心よりお祝い申し上げます。50周年、誠におめでとうございます。